平成30(2018)年「正覚寺報」11月号

◆ご　案　内

①仏教壮年会お聴聞の会11月4日(日)20時～

本格的な御法話が聞きたい、お聴聞がしたいとの念願に支えられて営んで参りました仏教壮年会恒例のお聴聞の会です。

②仏教婦人会例会11月16日(金)19時半～

仏婦月例会もその趣旨はお聴聞の会にあります。お聴聞を継続するうちに如来様のお育てに与るのです。皆様賑やかにお参り下さい。

③正覚寺庫裏の報恩講12月1日(土)10時。

◆平成30年度宝石山正覚寺報恩講

本年の宝石山正覚寺報恩講は、梯　實圓和上のお導きによる行信教校のご縁で、これまでいつかいつかと思っていた藤澤 信照先生にとうとうご出講戴きました。

滋賀組の総代研修他の機会を通じて広くご案内させて戴いたこともあり、お蔭様で他院様からのお参りの皆さんにもめぐまれ賑やかにかっちりとお聴聞戴きました。

これで少しは形の整った報恩講に一歩近づけたかと慶ばせて戴いておりますが、理想にはほど遠いものがあります。

なぜなら、南無阿弥陀佛と称えればただちに南無阿弥陀佛と聞こえて下さるのは、如来様のお喚(よ)び声ですと、御法話では噛んで含めるようにその次第をお話し下さいましたのに、御法話が終わると、皆様一斉に「シーン」としておしまいになってしまわれるからです。

「シーンはいけませんね」と申し上げると皆様「アッそういうことか」と我に帰られます。

このことからお初夜の席では、お客僧からお念仏の仕方まで実習して戴いたことです。

仏教の実践論「聞思修」の三慧思想に照らせば「聞」の成就は「思修」の次第に至ります。

「聞」とは、ご本願の物語りをお聴聞すること、

「思」とは、よかったとお話しを味わうこと、

「修」とは、阿弥陀様のお喚び声をお聞かせにあずかる「聞名」を目的として実際にお念仏することであり、「聞き、聞いて思念する」とも「聞いて、また聞く」とも現代語訳されるお経様の御文のお心です(Ref『仏説阿弥陀経』「執持名号」)。

そしてとうとう迷いの世の真っ只中にありながら「阿弥陀様のお喚び声」を直々にお聞かせに与ることを通して如来様にお遇いしていること(聞遇)に気付かせて戴くのです。

理想にほど遠いことの二と三は、「報恩講には誰か一人一家の代表がお参りしておれば足りる」との誤解があることは悲しいことであり、身体が不自由でもないのに、年に一度の営みである報恩講のご縁にお遇い戴けていないことは淋しいことです。

◆念仏子守歌(五木の子守歌の節で歌う)

満日中の最後に念仏子守歌をご紹介戴きお参りの皆様とご一緒に歌わせて戴きました。

1. おどんがお父さんは　南無阿弥陀佛
おどんがお母さんも　南無阿弥陀

2. もろたもろたよ　六字の智慧を
愚痴が感謝に　かわる智慧

3. おどんが笑うときゃ　阿弥陀様も笑う。
おどんが泣くときゃ　弥陀も泣く

4.夜半(よわ)の目覚めの　南無阿弥陀佛
つれてゆくぞの　おやの声

5.あゆは瀬に住む　小鳥は森に
わたしゃ六字の　うちにすむ

(後書き) 五木の子守歌の響きは、阿弥陀さまのお慈悲をお聞かせ戴くための響きそのものです。五番は、妙好人、六連島(むつれじま)のお軽さんのお歌「かるは六字の中に住む」がもとになっています。合掌。